村田峯次郎著

大村益次郎先生事蹟

限定五百部復刻

マツノ書店

内容見本

平生先生の言はれるのに「今日諸藩の兵が此の江戸に集り又北越地方に出て戰爭をするけれども、兵食と云ふものは、誠に粗末なものである、兵士の賴りにするのは米ばかりだ、此の米の惡い物を與へると云ふことがあつては、甚だ兵が可哀さうだ、實に兵士には米より外に賴るものはないと言つて、始終吟味された、それで米の惡いのが來ると、やかましく言つた、で殊更に兵食に與へる米は吟味してあつた、さう云ふ所がアノ人の意を用ゐたことだと思ひます、それから軍事のことは勿論のこと、萬事非常に忙しかつた、何も彼も先生に持込む、それで手紙などと云ふものは、端の方は、是だけはダメなものだ、唯寒暑の挨拶とか何だとか、或は陳者とか云ふやうな所は切つて捨てゝ仕舞つた、さうして入用だけ取つて置いて、それを以て始終用を辨じて居ります、實に讀む暇もなかつたと云ふやうなこともある。

それから又面白いことには、我々大總督府に居る時分に、遊びに行つたこともある、隨分中には惡いことをする人間もあつた、其の時に大村先生の諭しに、是迄は大總督府であつたが「今は東京の行政官、謂ゆる裁判所や、監察する所

内容見本

加茂水穂

先づ御維新の歳の五月下旬であつたが、其の時に西の丸の大廣間に、大總督府を開いてあつたが、其時に西郷隆盛が矢張り大總督府の參謀で東京に來て居つた、それから大村兵部大輔即ち益次郎先生は、其時は下參謀と云ふ名義でありました、そこで我輩はモト報國隊と云ふものを組織して、大總督宮に附て來て上野の戰爭が終ると間もなく、大總督府の應接掛を拜命して、總督府に出た、其出た二三日過ぎ、五月二十二三日頃であつたらうと思ひます、西郷氏が大村先生の前に出て「己れは國に歸る」と斯う云ふことであつた、さうすると大村先生「さうか宜からう」斯う云ふ唯簡單の一言であつた、それから、有栖川大總督宮の所へ西郷君が御暇乞に出た、所が宮樣は大層御心配なすつて、大村先生を呼んで「今西郷が歸ると云ふことを申出たが、ドウだらう」と仰せらるゝと、「サ別に用もないから宜うございませう」と斯ふ云ふ、さうすると西郷君の言ふには「宮樣に對しては、大村氏が居れば東京は大丈夫だ、モウ私は要らぬ人間だから、國に歸つて、是から國で又兵を養成して、北越へ出やうと云ふ考がござる、マダ北越の方は治らぬ、モウ江戸は是で治つたも同樣、大村が居れば懸念することは、ございませぬ」宮樣は「それは確か」と云はれて「それは

決して御心配に及ばぬ」と斯う云ふ譯で、西郷君は突然と御暇になる「左樣なら……」大村先生も座つて居て「左樣なら……」と誠に淡泊な挨拶で別れた、實にアー云ふ豪傑の仕事は、何にも外にない、それぎりてあつた、是等は實に豪傑揃ひの話であつて、他に類もなからうと思ひます、私は感じたので、記憶して居ります。

それから又面白い話しがあります、それは會津の落城の日で、九月二十三日のことであります、その時分は、今とは違つて、電信もなければ郵便もないが、丁度其の日の朝のことでありましたが、大村先生は宮樣の前に出て申されまするには、「今日は丁度會津を攻めて落城の日にならうと考へまする、實に朝敵ではあるけれとも、さて會津と雖も矢張り幕府の爲に敵するので、決して一己の私の爲に賊を働いたと云ふ譯でもない、併し今日落城だと思ふと、甚だ氣の毒なことに思ひ舛」と言つて御話しをしたことを聞いて居つた、果して其の日に落城して居ります、實に是等は帷幕の内にあつて千里の謀を運らすと言ふものであらうと考へます、丁度其の日に落城して居ります。

内容見本

大村益次郎伝の原典

内田　伸

大正八年は大村益次郎の没後五十年を迎え、靖国神社において、その五十年祭が挙行されたが、そのとき村田峯次郎先生の『大村益次郎先生事蹟』は刊行された。

村田先生にはこれより古く、明治二十五年刊行の『大村益次郎先生伝』もある。それは大村の伝記としては最も早いもので、大村の銅像が靖国神社に建設されるにあたり、その竣工式典に配布されたものらしい。五十七頁の小冊子であるが、大村の死後二十余年、まだ大村に直接面識のある者も多かったから、それらの聞き書きなどが中心となっている。これは村田先生の初期の著作であるが、小冊子なのが残念である。先生もそれを感じておられたのか、その五十年祭には進んでこの『大村益次郎先生事蹟』を執筆されたのである。

大正初年には、幕末維新に際して大村と行動を共にした人もまだ多く生き残っていた。この『大村益次郎先生事蹟』は村田先生がそれらの人々に直接会って書かれたものであるから、その内容は詳しく正しい。類書に比べてはるかに生彩を放っている所為である。さらに本書の特徴は、後半の「大村先生逸事談話」にある。

本書の構成は、前半が「大村の伝記」、後半は「大村についての談話集」からなっている。この「大村に生前面識のあった人々の談話」の収録は、何といっても貴重である。これによって大村の生存中の本当の姿を知ることができる。談話者は大村と十数年行動を共にした原田一道をはじめ、十五人に及んでいる。これらの談話は大村の伝記を補足するだけでなく、幕末維新史に新しい史料を提供するものとしても大変貴重である。（この「大村先生逸事談話」の部分は昭和五十二年、『大村益次郎先生事蹟』から切り離して一冊としてまとめ、マツノ書店から『大村先生逸事談話』として復刻出版された）この「大村先生逸事談話」があることにおいて、本書『大村益次郎先生事蹟』は、現在五十冊近く出版されているあらゆる「大村伝」中の白眉となっている。その後昭和初年頃に多く出版された「大村伝」は、みなこの『大村益次郎先生事蹟』から資料が取られているものばかりといってよい。

昭和四十七年に出版された司馬遼太郎著『花神』は、大村益次郎を描いた小説である。昭和五十二年にそれがＮＨＫの大河ドラマとなり、いわゆる花神ブームが起こった。そしてそれに便乗して「大村伝」も多く出版された。しかしこれらは、小説『花神』を下敷きにしたものであったから『花神』の小説としてのフィクションが、そのまま真実の如くに書かれている個所が多くある。

私はよく人から『花神』の内容に間違いはないかと聞かれたりする。そのとき私は「村田蔵六（大村益次郎）という名前だけが本当で、あとはみな作り事ですよ。小説とはそんなものではないでしょうか」と答えている。『花神』の中の村田蔵六は、幕末の貯蔵された革命のエネルギーを、軍事的手段をもって全国に普及する仕事を成し遂げ、全国津々浦々の枯れ木にその花を咲かせてまわった、いわゆる「花神」で、その技術者としての姿、仕事師としての人生が面白く豊かに描かれている。

大村益次郎の事蹟を広く人々に再認識させたという点においては、『花神』は実に有難い

立派な本である。しかし史実と比べてみると、『花神』の記述の誤りは多い。大坂の適塾に入門したとき「村田蔵六デアリマス」と挨拶したとあるが、大村が蔵六と改名したのは適塾入門よりもずっと後で、宇和島藩に仕えてからである。「宇和島藩文書」には「最初頃は良庵、後に蔵六」と見える。このことはこの『大村益次郎先生事蹟』にもその文書がはっきり書かれている。

また『花神』には、大村は全く馬に乗れなかったので、四境戦争の石州口では大将が歩いて行ったとある。しかし大村の遺品には馬の鞍などがあり、この『大村益次郎先生事蹟』には、石州大麻山の偵察には馬で行ったと書かれている。『花神』には大村は宇和島で「お稲」と同居していたとあるが、実際には大村の妻が宇和島に行って大村の世話をしていた。このことも「宇和島藩文書」に見え、この『大村益次郎先生事蹟』にも記されている。

とにかく『花神』ブームに便乗した「大村伝」は『花神』のこのようなフィクションをそのまま史実と認めて書かれているものが多く、正しい伝記として認められるものは無い。それで結局五十冊近い「大村伝」の中で、最も信頼出来、史料的にも価値のあるものとしては、この村田峯次郎先生著の『大村益次郎先生事蹟』ということになる。いわゆる〈大村益次郎伝の原典〉ともいえる書で、このたびの復刻を心から喜ぶものである。

■内田仲氏は、二十年以上も前から本書の復刻を薦めておられました。

■本書の特徴は上の文章に語り尽くされていますが、あえて補足すれば、後半の「大村先生逸事談話」についてでしょう。

■談話をされたのは、幕府の講武所出仕時代から大村と兄弟のように付き合いをしていた原田一道、大村の私塾、鳩居堂の門人伊藤雋吉、軍政局で一緒に仕事をしていた長岡護美や船越衛、友人の寺島秋介、天野御民、宇和島の人鈴村譲、長州の御用商人伊豆倉の番頭貞次郎など十五名に及び、内容も実に多彩な「生の史料」です。

■著者の村田峯次郎は、幕末長州の偉人村田清風の孫で、安政四年萩に生まれ、生涯を防長史の研究に賭けた人です。著書に『防長近世史談』『品川子爵伝』『高杉晋作』などがあります。

■体　裁　A5判三一四頁　上製貼箱入
■定　価　八千円（税込・送料380円）
■特　価　六千円（　〃　）
■特価締切　平成十三年十一月三十日
▼三点セット特価もあります
▼直販につき書店卸不可
限定五百部（番号入）
池袋東郵便局二の二三
☎〇八二二四〇三二九五
マツノ書店

内容見本

先生の異風は時俗に容れらず

醫者の流儀と違つて居ります、大抵の醫者は立派な着物でも着て病人に對してお世辭を能くして、何でも先方の氣に入るやうな事を云ふて人の當りを巧者にやると云ふやうな風でありますが、先生はさう云ふ流技は誠に大嫌いで、常に粗服を纏いお世辭は少しも云はない、そこで自然と人當りも優しくないやうな譯であるから甚だ面白くない、醫者と云ふ者はもつと世辭を上手にして身なりの立派な風でもして居らなければ有難味がないと云ふやうなことから、先生は折角開業はせられたが一向流行らない、あんなお醫者に診察して貰つては安心が出來ぬと云ふて病人も餘り賴みに來らず先づ門前雀羅を張ると云ふ有樣で、六ヶ敷い理窟を云ふたり蘭學の講釋をされたりするから、頓と普通の人の耳には分らぬ事が多い。

それで折角先生の學力あり智識があつてもその頃の世の中にはこんな風變りの醫者では一向適しなかつたのであります、併し何事も物は辛抱である此處は充分耐へて行かなければならぬと云ふ考で忍耐注意して居られましたが、此の有樣ではいつ迄立つても到底父母の心を慰めることも出來ぬ、却つて兩親に心配